

『エリンが挑戦！にほんごできます。』の現地化

—中国中等教育段階のための教材作成—

柳坪幸佳・鈴木今日子・松浦とも子

[キーワード] 中等教育、第二外国語、視聴覚教材、教材の現地化、異文化理解教育

[要旨]

中国の中等教育には、近年第二外国語として日本語を設置する学校が見られる。しかし、中国教育部による第二外国語のシラバスや教科書はまだなく、何をどう教えればいいのか、試行錯誤をしている教師が多い。このような状況の中、国際交流基金北京日本文化センターは、教材『エリンが挑戦！にほんごできます。』（国際交流基金、2007）の内容を厳選、中国の現地事情を考慮した内容を追加し、『エリンが挑戦！にほんごできます。艾琳学日語』として出版した。教材の作成にあたっては、中国の教室で第二外国語の主教材として使えるようにすること、同時に、第一外国語の日本語授業でも視聴覚教材として使えるようにすることを目標とした。教材に対しては、教師・学習者ともに好意的な評価を示したが、異文化理解の育成に関しては教師への支援が必要なのことがわかった。

1. 作成の背景

中国の中等教育機関で日本語を学んでいる学習者の数は、2012年の国際交流基金「日本語教育機関調査」によると約8万9000人である。2009年は約6万2000人であった。これは、1998年の約11万6000人をピークに減少傾向を続けていた中等教育機関の学習者数の巻き返しを意味する。

その原因は、中等教育段階で第一外国語として日本語を選択する学習者が減少傾向にあったのに対し、2012年の時点では第二外国語や課外活動の学習者が増加したためと思われる。中国では英語、日本語、ロシア語から第一外国語が選択できるが、近年英語に押されて学習者が減少していた。しかし、2001年に第二外国語の設置が校長の裁量で認められることになり⁽¹⁾、第二外国語としての日本語教育が展開されるようになったため、課外活動などでの日本語履修者が増えたことが全体の学習者数を押し上げたものと考えられる。

国際交流基金北京日本文化センター（以下、北京日本文化センター）では、2010年度から「中国中等教育における第二外国語としての日本語教育の実態調査」を行っている⁽²⁾。そこでは以下のことが明らかになった。

- ・第二外国語の日本語教育が開始された年は2005年以降が多い。
- ・開設理由は「素質教育」⁽³⁾重視の理念に基づき、「国際的な視野を身につけること」という理由が多い。
- ・授業回数は1週間あたり1回か2回が多い。
- ・中学校、高校とも3年生では開設されない学校が多く、1・2年生の履修が多い。
- ・他外国語の第二外国語教育としてはドイツ語、フランス語が優勢である。
- ・教える上で困ることとして「教材不足」をあげる機関が多い。

また、一言で第二外国語と言っても、そこには様々な目的と展開の仕方があることがわかった。具体的には以下のとおりである。

1. 「双語」と呼ばれる英語と日本語両言語についてほぼ同等の授業時間数を確保し、かなり高いレベルを目標とするコース。中学から両言語を学習し、高校になってから、大学受験の科目を日本語にするか、英語にするか選択するシステムをとる学校もある。学習者の学習能力が高い学校が採用している。
2. フランス語やドイツ語、ロシア語などから選択するコース。「第二外国語」と呼ばれている。外国語教育を特色とする学校に、この方法が多い。英語のほかに「第二外国語」を週2回程度学ぶことが多い。
3. 「選修課」という、日本でいう必修クラブに似た時間に、自分の興味に合う科目を週に1回履修する。現在多くの普通中学、高校で行われている。
4. 職業学校において就職のために英語以外の言語を学ぶ。

このような調査の結果から、北京日本文化センターでは、JF日本語教育スタンダード（以下、JFスタンダード）が理念として掲げる「相互理解のための日本語」、更にその実現のために必要とされる「異文化理解能力」の育成と「課題遂行能力」の養成を推進するため、中等教育における第二外国語としての日本語教育拡大を目指し、関連公的機関にどのような働きかけを行うべきか具体的な支援策を考えた。校長の裁量で第二外国語が開始されることから、校長に日本語教育に対する理解を高めてもらうことが重要であり、その推進のためにはシラバスの整備及び教師への支援と教材の充実が優先課題になってくる。

中国で使用されている中等教育第二外国語用日本語教材は、公益財団法人国際文化フォーラムが大連教育学院と共同で編集した『好朋友』シリーズ（外語教学与研究出版社）があるだけで、2010年の調査の時点ではまだ市販されていない状態であった。第一外国語の日本語教科書を出版している中国教育部直轄の人民教育出版社も、第二外国語教育の必要性和将来性に注目

しているが、教育部がまだシラバスを作っていない段階で、第二外国語の教科書作成には着手していない。

このような状況から、北京日本文化センターと人民教育出版社は協力して実態調査を継続した。そして、日本で2007年に国際交流基金から出版されている『エリンが挑戦！にほんごできます。』（以下、『エリンが挑戦（原版）』）が、異文化理解能力、課題遂行能力の育成に適切だと判断し、中国の教育事情に合わせ改編、出版することになった。タイトルは、『青春校園情景短劇 エリンが挑戦！にほんごできます。艾琳学日語』（以下、『エリンが挑戦（中国版）』）とした。また、この教材は、ここまで述べてきたように、将来正式に教育部のシラバスに沿った第二外国語用日本語教材が編集、出版されるまでの教材として作成されたが、同時に、中国ではまだ制作されていない第一外国語用の視聴覚教材としても使用できるよう、配慮を加えて準備を進めた。

2. 『エリンが挑戦（中国版）』の対象と目標

『エリンが挑戦（中国版）』を編集・出版するにあたって、中等教育現場の日本語授業タイプに合わせ、以下のように対象と目標を設定した。

- ①第二外国語主教材：週1～2回の日本語授業で、異文化理解に重点をおく授業を想定
- ②第一外国語副教材・視聴覚教材：第一外国語として日本語を教える学校の他、双語（英語と日本語）の高いレベルを目標とする学校、及び職業学校において就職のために英語以外の言語を学ぶ学校を想定

編集に当たっては、中国の状況に合わせて現地化し、教室でそのまま使えることを目指した。『エリンが挑戦（原版）』については、①全て字幕付きでないため入門レベルの学習者には意味がわからない箇所がある、②出版時期の関係から、『エリンが挑戦（原版）』のCan-doはJFスタンダードそのものが反映されたものではない、③タスクが用意されていないので、慣れない教師は現場でうまく活用できない、④中国中等の第二外国語の授業時間数に合わせる必要がある、などの課題が予想された。このような課題を受け、同教材及び付属DVDを中国の日本語授業で使用するために以下の解決法を考えた。

- ・DVDのすべての台詞に中国語字幕を入れ、内容が理解できるようにする。
- ・JFスタンダードのCan-doを反映させる。
- ・コミュニケーション重視のタスクを用意する。
- ・中学、高校の第二外国語の授業時間数と学習期間は限られている⁽⁴⁾ため、『エリンが挑戦（原

版)』の豊富な素材を厳選し、一部は順番を並べ替える。

3. 『エリンが挑戦 (中国版)』の構成と内容

3.1 構成

『エリンが挑戦 (原版)』は3冊に分かれているが、中国版が想定する学習者の学習期間が短いことから1冊にし、更に持ち運びしやすいようページ数を減らす必要があった。DVDの枚数は1枚だけにした。DVDを付けると値段が高くなるが、学校教科書である以上極力安価に抑えなければならないため、もともと計4枚あったDVDを1枚に減らし、ディスク容量に合わせて内容を選定した。

課の数は、授業時間に合わせて決定した。授業時間は週1回40～45分、1学期15回、2回の授業で1課終了、学習期間は1年半から2年間と仮定した。また第二外国語としての難度や本の値段、厚さを考慮し、20課程度が適切と考え、もともとの25課を組み直して20課構成にした。

編集の過程では、映像内容が時代に合わなくなってきたもの、教室の授業での優先度が低いと判断したものを削除した。そのため、各課の「やってみよう」「これは何?」を削った。一方、教室での使用のために、各課に「活動」「文化」のコーナーを新しく加えた。また、最終課に「日本語を勉強している人たち」として、「世界に広がる日本語」から、中国・韓国・ブラジル・タイ・フランスの高校生及び中国のアナウンサーの素材を採用した。

また、ひらがな・カタカナ・数字の表、エリンたちが中国へ来る内容の漫画を特別に描き下ろした他、「Can-do Check!」、[記録ポートフォリオ]⁶⁾「Can-doのための語彙表」を作成し、加えた。「日本の高校生」も抜粋し、巻末に掲載した。

教科書の指示文、説明などは全て中国語とした。各課の構成と作成作業およびその他の構成要素については表1と表2のとおりである。

表1 各課の構成

内容	ページ数	作業
課のとびら	1	・原則として原版に準ずる。一部 Can-do 書き換え
漫画基本スキット	2	・原版に準ずる。台詞の中国語訳を追加
おさらい基本スキット (スクリプト)	1	・原版に準ずる。漢字表記を増やす
表現練習 (Can-do 達成のための表現・解説・例文)	1	・冒頭に漫画から「大切な表現」を抜粋し、イラスト入りで紹介 ・原版の表現+WEB版『エリンが挑戦!にほんごできます。』(以下、「WEBエリン」)「大切な表現」中の「解説&例文」から表現解説を抜粋 ・地名・人名は中国向けに書き換える

『エリンが挑戦！にほんごできます。』の現地化

練習 （「表現練習」で扱った表現の練習）	2～4	・ 原版の練習+WEB エリン「大切な問題」中の「表現練習」から問題を抜粋+新規作成問題
活動 （課の Can-do 達成のためのタスク）		・ 原版の練習+WEB エリン「大切な問題」中の「表現練習」から抜粋+新規作成問題
いろいろな使い方		・ DVD 中ポイントになる表現を台詞形式で掲載
応用スキット		・ Can-do に関わる表現をスキットから抜粋掲載 ・ 場面に合った写真を載せる
文化	1	・ 新規作成問題
見てみよう	2または3	・ 原版に準ずる、漢字表記を増やす ・ 最後に振り返りのための課題を載せる
合計	10または12	

表2 その他の構成要素

内容	ページ数	配置
Can-do Check!	各2×5	5課ごとに挿入
描き下ろし漫画「エリン、ようこそ中国へ！」	8	巻末
付録「日本の高校生」5名分スクリプト	3	巻末
ひらがな・カタカナ・数字表	3（各1）	巻末
Can-do のためのことば	5	巻末
総ページ数（前言・目次等含まず）	258	

3.2 内容

3.2.1 現地化のための工夫

中国の中等教育の事情に合わせ、『エリンが挑戦（中国版）』は以下のような工夫を行った。

（1）「練習」と「活動」の追加

『エリンが挑戦（中国版）』では、コミュニケーション重視の授業に慣れない教師でもすぐに使えるように「練習」と「活動」を追加した。『エリンが挑戦（原版）』にも「練習」があるが、主教材を想定していないため問題数が限られ、また聴解問題がなかった。そこで、新たに練習問題を書き加え、教室でそのまま使えるようにした。聴解問題は WEB エリンから採用し、音声は DVD に収録した。「活動」は各課の Can-do に合わせたタスクで、中国版の作成のために一部を除いて書き下ろした。「練習」と「活動」の解答例及び聴解問題のスクリプトは、北京日本文化センターのホームページに掲載した。

（2）異文化理解能力の育成

異文化理解能力の育成も、『エリンが挑戦（原版）』の柱である。同教材では、同年代の若者の日常生活をビデオで見ながら、学習者自身が自分で気付きを得ることを目指しているが、中

国では教師が日本の若者の文化や日常生活について、知識伝達型の授業を行うことが予想されたため⁶⁾「文化」というコーナーを新たに書き加え、学習者の気付きを促す仕掛けを入れた。例えば第2課では日本の学校生活やお弁当について、日本の高校生はどこで昼食をとるか、何を食べるかをDVDを見る前に推測し、更に見た後でどうだったかを考えて、表に埋めさせる工夫をした。また、ステレオタイプに陥らないよう、表の中では複数の食事の映像を比較させる設問を作った。

「記録ポートフォリオ」の中にも、言語面の学習だけでなく、DVDを見て面白いと感じたことや疑問点を振り返らせる設問を入れた。

(3) その他

その他、中国の現地事情に合わせ、漢字表記(ふりがな付き)を増やし、指示文の中国語化、中国の地名・人名の採用、漫画台詞の中国語翻訳などの編集を行った。また、DVDは全編字幕付きとし、中国語字幕を作成した。『エリンが挑戦(原版)』のDVDには字幕が付いていないコーナーもあったこと、また、WEBエリンは全編字幕付きではあるが、教室のインターネットが整備されていない学校もあり、また仮に教室で見られても画面が小さいなどの課題があったため、新たに字幕付きDVDを作成する必要がある。

更に、『エリンが挑戦(中国版)』のために、エリンたちが中国にやってくるという漫画を特別に描き下ろした。それによって、主人公エリンに親しみを感じさせることや、身近な環境での文化接触を考えさせることを狙った。

3.2.2 JF日本語教育スタンダードの反映

課題遂行は『エリンが挑戦(原版)』でも理念の柱であり、各課にCan-doが示されていた。しかし同教材はJFスタンダード以前に出版されたため、JFスタンダードのCan-doとすり合わせ、一部を書き換える必要があった。書き換えは原則として『エリンが挑戦(原版)』のCan-doに準じ、いくつかの変更を加えた。例えば、第2課「おねがいする」というCan-doは誰に対してのおねがいか、それに対してどのような反応をするかを考え、「教師の授業中の指示に対して正しく反応できる」「友達に対して簡単な言葉でお願いができる」の2つに分けた。JFスタンダードと同時にCEFRも参照した。なお、レベルはA1から始まり、16課以降はA2.1レベルとした。Can-doはまず日本語で作成し、最終的に中国語の翻訳に合わせて調整した。

以下、Can-do対照表からの抜粋である。

表3 Can-do 抜粋

課 (中国版)	場面 (中国版)	レベル (中国版)	『エリンが挑戦 (中国版)』 Can-do	『エリンが挑戦 (原版)』 Can-do	JF スタンダードまたは CEFR の Can-do
L.1	教室	A1	友達と初めて会った時の基本的な挨拶が正しくできる。	はじめてのあいさつ	社会的なやりとりをする 友人や近所の人と、時間帯に合った基本的な挨拶を交わすことができる。<JF スタンダード>
L.2	学校	A1	教師の授業中の指示に対して正しく反応できる。	おねがいする	共同作業中にやりとりをする 注意深く、ゆっくりと表現された質問や説明なら理解できる。短い簡潔な指示を理解できる。<JF スタンダード>
			友達に対して簡単な言葉でお願いができる。	おねがいする	共同作業中にやりとりをする 買い物の移動など、人の助けが必要なとき、「助けてください」など、短い簡単な言葉で頼んだり、ゆっくりとはっきりと話されれば、頼まれたことに対応したりすることができる。<JF スタンダード>
L.15	授業	A1	簡単な言葉で状態や感想を描写できる。	はんたいのことを言う	インタビューする、受ける 個人的なことについて、慣用句的な言葉遣いもなく、ごくゆっくりとはっきりと話してもらえらるなら、簡単かつ直接的な質問に答えることができる。<CEFR>

各課の「活動」は、Can-do 達成に合わせて作成した。また、5 課ごとに「Can-do Check！」と「記録ポートフォリオ」をはさみ、Can-do を確認した。巻末には「Can-do のためのことば」を入れ、入門レベルの学習者が Can-do 達成のために必要な最低限の語彙を示した。

4. 作成の流れ

作成は、北京日本文化センター日本語専門家でもずシラバスを決定し、JF スタンダードと CEFR を参照して A1 及び A2.1 レベルから Can-do を記述した。詳細は、3.2.2 で述べたとおりである。その後、2011年11月に人民教育出版社編集部と会議を開き、中国中等教育の日本語教育現場に合わせて内容を検討した。そして、『エリンが挑戦 (原版)』から素材を選定し、並べ方を検討した。その後、具体的な執筆や書き直しに入り、「活動」と「練習」の作成や「表現練習」中の文法説明補充を行った。執筆や書き直しと並行して字幕の方針を決定し、DVD 作成担当者と会議を行った。DVD 作成は人民教育出版社の映像部門である音像教育出版社に依頼した。

実際に作成を始めてみると、いくつかの問題が起こった。イラストは新たに描き下ろさず、『エリンが挑戦 (原版)』及び WEB エリンから、写真・イラストデータを採用したが、データ

の解像度の調整や、加工修正が必要となった。

更に、中国語に翻訳した指示文を、中国の学校教科書にふさわしい文体に調整する必要があった。これについては、人民教育出版社の担当編集者がチェックを行った。

特に難しかったのは、DVD 編集と字幕作成である。『エリンが挑戦 (原版)』の字幕データから中国語だけを取り出して編集できなかつたため、再度字幕を付け直す必要が生じた。DVD サンプルが完成してからも、音像教育出版社に日本語がわかる担当者がいないため、字幕と台詞を合わせるのに時間がかかり、スケジュール調整が必要となった。

このように、作成にあたってはいくつか困難な点があったが、国際交流基金関係者一同の協力を得て、編集を行った。内容については、『エリンが挑戦 (原版)』の制作スタッフに都度確認を行った。同教材は2013年3月に正式に出版された。

以下は、制作スケジュールである。

表4 制作スケジュール

時期	全体スケジュール	日本語専門家作業
2011年9～10月		シラバス決定 JF スタンダードと CEFR を参照。A 1 及び A 2. 1からの Can-do の記述
2011年11月	人民教育出版社と合同制作会議	
2011年11月～ 2012年6月		素材の検討、並べ方の検討 「活動」作成、「表現練習」中の文 法説明補充、「練習」作成
2012年5月		字幕の方針検討
2012年6月	DVD 制作会議 原稿を人民教育出版社に提出（描き下ろ し漫画8ページを除く）	
2012年8月	人民教育出版社から1課分のDVDサン プル提出	描き下ろし漫画のストーリー作成
2012年9月	上記DVD サンプルを踏まえ、音像教育 出版社と修正箇所の確認、及び進捗状況 報告を受けてスケジュール調整を行う	
2012年10月	描き下ろし漫画原稿完成、人民教育出版 社に提出	
2013年1月	DVD チェック（一部）	DVD チェック
2013年2月	初校返却	校正
2013年3月	DVD 残りチェック 3校返却 DVD 全体チェック、完成、出版	DVD チェック、校正

5. 第二外国語での試用と課題

『エリンが挑戦 (中国版)』が元々の作成目的であった第二外国語主教材としてどのように受け入れられるか、学習者の反応と教師の使い方を見るため試用を行った。期間は2012年9月からの1年間、北京の中等教育機関2校で実施した。授業担当者は各校の中国人日本語教師で、

北京日本文化センターの日本語専門家が状況に応じて訪問、教案確認や授業アシスタントをした。試用開始半年目の2013年1月に、学習者に対して自由記述式のアンケートをとった。以下、その抜粋である。

質問. DVD 中のエリンと日本人の生活情景を見て、どんなことを不思議に思いましたか。最初に感じたことは何ですか。（自由記述）

- ・学生生活はリラックスしていて、楽しそうだと感じます。彼らの授業外の生活はとても豊かです。いろいろなグループ活動に参加することができます。
- ・日本の通りは人がとても少ないです。学校から家まで近いようで、その上学校が終わるのがとても早いです。そして学校がヘアスタイルに対して厳しくありません！コンビニは万能だと感じます。
- ・生活は比較的リラックスしていて、ストレスは中国の学生ほど大きくありません。全く異なる生活習慣がたくさんあります。
- ・日本の生徒の昼食は基本的にすべて弁当です。私は冷たいご飯が非常においしくないと思いますが、日本の生徒はみな慣れてます。私は日本の生徒がすべて座って地面で昼食を食べるのを見ました。場所は廊下のようなようです。最初に考えたのは、寒くないのかということでした。それでも、日本と中国はいろいろな面でとても似ています。＜原文はいずれも中国語＞

記述を見ると、学習者たちは日常的な題材に興味の目を向け、「学生の髪型にはあまり厳しくなさそう」「町に人が少ない」等、教師が常識ととらえ見過ごしがちな事象からも多くの発見をしていることがわかった。また、「ストレスは中国の学生ほど大きくありません」「いろいろな面でとても似ています」のように、自身の生活と比較しながら考えている様子も見ることができた。更に、この教材が好きかどうかを聞くと、23名中22名(95.6%)が「とても好き」または「好き」と答えており、同教材が第二外国語主教材として肯定的に受け止められていることがわかった。

試用が終了した2013年6月に、中国人教師Aに対してインタビューを行った。教師は授業で文化を扱う理由について、「文化を教えることで単語の理解が深まる」のように、知識習得や試験対策のために文化を教えるという認識に留まっていた。その他に、「文化を教えると成績が悪い生徒も興味を持つから」といった発言があった。

以上、試用後の調査から、学習者は教師が考える以上に映像を通して様々なことに気付く一方、教師のほうは異文化理解を表面的にとらえたり、言語学習のための補助的なものと見なす傾向があることがわかった。そのため、出版後は教師に対し、異文化理解能力育成に関する支援が必要だと考えた。

6. 研修の実施

2013年3月に正式に出版された後、『エリンが挑戦（中国版）』の研修会を各地で実施した。2013年度は北京をはじめ計3か所、2014年度は同年8月時点で計3か所で行った。2014年8月時点までの参加者数は延べ約180名である。

研修では教科書説明ではまず教科書の概要を伝え、JFスタンダードの考え方が教科書にどのように反映されているか、中国の教育現場に合わせてどう編集を行ったかということを説明した。その後、第二外国語と第一外国語でのそれぞれの使い方を、実際の練習問題やタスク活動の体験を交えて紹介した。同教材は、前述のように、当初第二外国語のための教材を目指していたが、その作成は、第一外国語としての使用も念頭に入れて行われたためである。研修には、第一外国語の教師も多く参加していた。異文化理解教育については、Byram (1997) の異文化理解能力の構成要素である「態度」「知識」「比較・解釈する技能」の考え方にに基づき、授業で文化を扱うことについて、ワークショップ形式で考えた。

参加した教師からは、以下の感想が寄せられた。特に異文化理解については新鮮に受け止められたようである。(抜粋、原文も日本語)

- ・「エリン」という教材はとても使いやすいと思います。映像を見て直接日本のことを知ることが学生にとって興味があって勉強できると思われるに違いありません。
- ・今までは授業で知識を学ぶだけで文化の宣伝を気にしなかったが、今回の研修会を通して文化知識の重要性を気付きました。とても良い時間でした。
- ・これから二外の授業で異文化を学生に理解してもらう能力を養うことに力を入れます。学生の興味を出発点として。

教師研修会は、2014年9月以降も中国各地で継続的に実施することを予定している。

7. 『エリンが挑戦 (中国版)』寄贈校追跡調査

7.1 追跡調査及びアンケートの実施

2013年に中国各地で研修会を実施した際、希望する学校に『エリンが挑戦 (中国版)』の寄贈を行った。寄贈の条件は、配布の上限冊数を30冊とし、担当教師は学期終了時に簡単な授業進度記録、状況報告、学習者へのアンケート回答を提出すること、北京日本文化センター専門家の視察などを受け入れることとした。16校に同教材を寄贈し、そのうち2014年4月までに4校を北京日本文化センターの日本語専門家が視察し、学習者と教師に使用についてアンケート調査を行った。以下、アンケートの結果の一部を掲載する。

アンケート実施時期：2013年10月～2014年4月

アンケート実施機関：『エリンが挑戦 (中国版)』寄贈校4校

(外国語学校1校、普通校1校、職業高校2校)

学習者へのアンケート (原文は中国語)

アンケート回答数：159 (中学生97、高校生62)

『エリンが挑戦！にほんごできます。』の現地化

- ・『エリンが挑戦（中国版）』が好きですか。

とても好き	好き	あまり好きではない	好きではない
104 (65.4%)	55 (34.6%)	0	0

理由（自由記述）：

面白い／内容が豊富／生き生きしている／実用的／簡単／漫画がある／分かりやすい／遊びながら勉強できる。退屈じゃない／授業以外の知識が増える／DVDも本もある／漫画が勉強に役立つ

教師へのアンケート（原文は日本語）

アンケート回答数：15

- 1) 『エリンが挑戦（中国版）』を使っているクラスについて教えてください。※複数回答あり

中学1年	中学2年	高校1年	高校2年	高校3年
1	2	8	4	2

第一外国語	第二外国語	課外活動
11	1	3

※1校は第一外国語としても第二外国語としても日本語を教えている。

- 2) どのように使っていますか。

主教材として	副教材として	その他
3	8	3

- 3) 『エリンが挑戦（中国版）』を使っての感想や学習者の反応を書いてください。
（一部抜粋）

- ・学生は特にビデオの部分が好きで、日本高校生の日常生活からできたビデオだから、学生の興味と熱意を持たせることができる。「見てみよう」という部分はいろいろな文化知識を教えてくれて、それは文法の教科書では習えないものだと思う。教師としては、このテキストを使って、文法だけでなく、日本でどのように生活するかも、学生に教えられて、とても便利だと思う。かなり役に立つ。
- ・三年生にとって文法や文型の説明がやや少なく簡単であるから、基本知識を学ぶ時の主要教科書ではなく、聴解や会話の能力の向上にやくだつものとして使いやすい教材であると思います。
- ・生徒は漫画が好きで、いつも積極的に教科書に出ている場面を自分の発想なども入れて演じています。
- ・生徒の日本語のレベルによって、『エリンが挑戦（中国版）』の使い方も異なるので、非常に便利です。

- 4) 『エリンが挑戦（中国版）』を使って自分の授業が以前に比べて変わったと思うことがあれば書いてください。（一部抜粋）

- ・授業の内容に日本の文化の習得も取り入れようになりました。
- ・日本の社会状況をたくさん紹介できた。
- ・本当に「日本語」という言語を教える感じがした。字幕を見せずにビデオだけ見せたので、学生に以前よりもっと授業に集中してもらった。文法とともに文化知識も同時に身に付けてもらって、日本語を覚えるから日本語を使うという目標も取り遂げた。学生が将来、もし日本で同じような場合に会ったら、すぐ自然に使えるかもしれない。
- ・いろんな場面が出てくるので授業の内容が豊かになりました。
- ・まずは授業の雰囲気が変わりました。生徒さんが日本語を使ってしゃべることが簡単になってきて、面白くなりました。それから日本のいろいろなことを知り、日本へ行って、自分の目でみたいなあと思う生徒が多いです。また、日本の高校生と交流したくなりました。

5) その他、感想や意見など自由に書いてください。(一部抜粋)

- ・副教材としてもやはり中学生、特に中学校1年、2年生に対しては難しいかもしれません。単語が難しいからです。
- ・毎課のあとに新出単語もつけていただければ。
- ・日本文化に関するコラムをもっと増してほしいと思います。
- ・学校生活のほかに、就職とか、社会のことなどを幅広く取り扱う中級レベルの教科書があればと思います。
- ・初心者にとってはちょっと早口的感覺です。

6) 授業で使っている部分に○をつけてください。

DVD	回答者数11	本 冊	回答者数7
基本スキット	9	Can-do 目標	1
表現練習	4	基本スキット (まんが)	4
いろいろな使い方	7	基本スキット (会話文)	3
応用スキット	8	表現練習	4
見てみよう	10	練習	4
世界に広がる日本語	6	活動	6
日本の高校生	7	いろいろな使い方	2
		応用スキット	2
		文化	4
		見てみよう	5
		「見てみよう」最後の問いかけ (ホニゴンの台詞)	2
		日本語を勉強している人たち	1
		Can-do Check!	1
		記録ポートフォリオ	0
		Can-do のためのことば	1

7.1.2 中国版『エリンが挑戦』使用アンケート結果まとめ

同教材を使用した学習者は、アンケートに回答した159人が、『エリンが挑戦 (中国版)』を「とても好き」または「好き」と回答している。また、学習者たちは、映像や漫画を見ながら楽しく日本語や日本文化を学ぶという学習スタイルを好んでいることもアンケートへの記述からわかる。

今回、アンケート調査に協力してくれた4校は、いずれも第一外国語として日本語を学んでいる学校である。なお、うち1校は第二外国語としても日本語を教えている。教師へのアンケートからは、「教師が文法だけでなく文化についても意識するようになった」や、中には「なぜ日本語を学ぶのか、学習目標を明確にできるようになった」という記述も見られ、同教材を使用することで、文化や学習目標の重要性への教師の気づきが促されたことが伺える。

使用箇所をみると、DVDはドラマ部分(基本スキット・応用スキット)のほか、「見てみよう」を使用している教師が多い。これは、アンケートの記述にもあるように、教師が文化を

意識的に授業に取り入れているからであろう。また、アンケートの中には、映像を使うことによって学習者が授業に集中できるようになった、学習者はビデオが好きだといった記述があった。このように、同教材が視聴覚教材として評価を得ていることがわかった。

『エリンが挑戦（中国版）』本冊の使用は、DVD 使用よりやや少なかった。また、使用箇所をみると「記録ポートフォリオ」以外は、全て使用されている。最も使用されているのは「活動」であり、「表現練習」「練習」「文化」についても半数以上の教師が使用していると回答している。3.2.1でも述べたように、現地の中学、高校での使用を想定しての作成意図が、現場のニーズと合っていたと言える。

このアンケート調査の結果に見られるように、『エリンが挑戦（中国版）』は中国の中学生・高校生に受け入れられ、かつ、日本への関心を高め、日本語学習意欲を向上させられるという点、また、教師も同教材の使用により文化を意識し、学習者の異文化理解能力の育成を促すことができるという点において効果があったと評価された。今回は、前述のような理由で第一外国語の教師の回答数が多かったが、今後は本来の対象である第二外国語の教師や学習者への調査を引き続き行い、その効果をさらに検証していく必要があると考える。

7.2 『エリンが挑戦（中国版）』広報と教師支援

『エリンが挑戦（中国版）』の広報のため、2014年4月に同教材の特設サイトを公開した (<http://www.jpfbj.cn/erin/>)。特設サイトは教師を対象にしており、教材概要のほか、学習者や教師の感想、使用した授業の録画映像、第一外国語と第二外国語の授業での使用例をそれぞれ掲載した。なお、授業の録画映像は誰でも投稿できるようになっている。同教材に含まれていない文字学習を補うためのかな指導用教材も掲載し、無料ダウンロードできるようにした。

また、北京日本文化センター主催で、『エリンが挑戦（中国版）』教案コンテストを企画し、2014年8月現在募集中である。教案コンテストは、教材を広報するとともに、実際に使用してもらうことがねらいである。コンテストの応募対象は中国の中学、高校の中国人日本語教師で、『エリンが挑戦（中国版）』を使用して教案を作成する。同教材を現在使用してなくても応募可能である。9月に人民教育出版社と審査を行い、2015年3月の全国中等日本語教師研修会（北京日本文化センター、人民教育出版社共催）で表彰し、受賞者に発表を行ってもらう予定である。

『エリンが挑戦（中国版）』の教師研修会は今後も継続的に実施し、同教材の説明とともに、課題遂行や異文化理解についての研修を実施していきたい。

8. まとめ

以上、『エリンが挑戦 (中国版)』の作成過程と作成後の展開を記述した。中国の中等教育段階における第二外国語教育という現地事情に合わせて再編集した同教材は、中国の教育現場において、第二外国語の主教材としても第一外国語の副教材としても、認められる可能性があることがわかった。と同時に、教師が学習者の異文化理解能力の育成に同教材を十分活用できないなどの課題も見えてきた。今後は広報とともに、教師研修を通じて教師支援を行いたいと考える。また、第二外国語教育に関心を持つ校長など学校関係者にも働きかけを行っていききたい。

中国の中等教育における第二外国語は、2014年時点では正式なシラバスは作成されていない。しかし将来的にシラバスが整備されてきた時に備え、人民教育出版社と連絡をとりつつ、中国の中等教育事情についての情報を常に集めていきたい。

[注]

- ^① 中国教育部『義務教育課程設置実験法案』(2001年9月)
- ^② 調査内容は「中国の中等教育機関における第二外国語としての日本語教育の現状調査」『日本語学2011年7月号』に詳しい。
- ^③ 生徒の人間性を育て全人格的に育成する教育を中国では「素質教育」と呼び重視している。
- ^④ 第二外国語のための授業時間は、異文化理解に重点をおくタイプでは、週に1~2回程度と考えられる(1年で30時間、2年実施できたとしても60時間)。また、学習時期も受験に関係のない1年生及び2年生前半が多い。
- ^⑤ 「記録ポートフォリオ」として、5課ごとに「今まで勉強した中で難しかったことは何ですか」「今まで見たDVDの中で不思議に思ったことは何ですか」との設問を入れ、学習や気づきを振り返らせた。
- ^⑥ 教材普及と同時に実施したアンケートの結果、教師は文化を教えることを重視してはいるものの、その理由は「好奇心」に限定される傾向があり、「多様性」や「背景を考える力」などの育成については十分に考慮されていないことがわかった。また、授業で文化を扱う時は、知識伝達型の教え方であることが想像された。詳細は、柳坪・松浦・鈴木(2014)「異文化理解能力育成を目指した教材開発と中等教育日本語教師の意識—『艾琳学日語 エリンが挑戦! にほんごできます。』」『日語教育と日本学』第4輯を参照のこと。

[参考文献]

- 王崇梁・小長谷友香・佐藤修(2011)「国際交流基金レポート最終回中国の中等教育機関における第二外国語としての日本語教育の現状調査」『日本語学』Vol. 30, No. 8, 84-93
- 中国教育部(2001年9月)『義務教育課程設置実験法案』
- 国際交流基金(2007)『DVDで学ぶ日本語 エリンが挑戦! にほんごできます。』vol. 1~vol. 3, 凡人社
- (2010)「JF日本語教育スタンダード」<https://jfstandard.jp>
- (2013)『海外の日本語教育の現状 2013年発行 2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版

『エリンが挑戦！にほんごできます。』の現地化

- 国際交流基金北京日本文化センター（2013）『青春校園情景短劇 エリンが挑戦！にほんごできます。艾琳学日語』人民教育出版社
- 柳坪幸佳・松浦とも子・鈴木今日子（2014）「異文化理解能力育成を目指した教材開発と中等教育日本語教師の意識—『艾琳学日語 エリンが挑戦！にほんごできます。』」『日語教育与日本学』第4輯、1-6、華東理工大学出版社
- 築島史恵（2010）「国際交流基金レポート4 海外のニーズに応える素材型視聴覚教材の開発～DVD教材『エリンが挑戦！にほんごできます。』」『日本語学』Vol. 29、No. 3、88-99
- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*, Multilingual Matters LTD.
- WEB版「エリンが挑戦！にほんごできます。」<http://www.erin.ne.jp/>